



TITLE:

# 日本における入試改革動向と国際バカロレアの可能性

AUTHOR(S):

次橋, 秀樹

---

CITATION:

次橋, 秀樹. 日本における入試改革動向と国際バカロレアの可能性. 大学入試のあり方を問う --国際比較を通して 2018: 1-35

ISSUE DATE:

2018-05-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/231902>

RIGHT:

## 日本教育学会 近畿地区 研究集会

### 「大学入試のあり方を問う——国際比較を通して」

日 時：2018年5月12日（土）13時半～16時半（受付13時）

場 所：京都大学 本部構内 総合研究2号館1階 教育学部 第一講義室

[http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/access/campus/yoshida/map6r\\_y/](http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/access/campus/yoshida/map6r_y/)

（上記地図34番の建物、北側1階。建物には、北側入り口からお入りください。）

アクセス：最寄りのバス停「百万遍」

地下鉄今出川駅・京阪出町柳駅より市バス201番

阪急河原町駅より市バス201番

京都駅より市バス17番・206番 など。

※詳細は、次のウェブサイトをご確認ください。

<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/access/>

講演者：次橋 秀樹氏（京都大学大学院教育学研究科・博士後期課程・大学院生）

「日本における入試改革動向と国際バカロレアの可能性」

細尾 萌子氏（立命館大学・准教授）

「フランスの高校改革と大学入試改革—高校の内申点重視の功罪—」

南部 広孝氏（京都大学大学院教育学研究科・教授）

「東アジア諸国における大学入試改革の動向」

趣 旨：日本においては、少子化が本格化し、大学全入時代に突入する中で、現在、急ピッチで大学入試の改革が進められている。その中では、2021年からの大学入学共通テストの導入、各大学におけるAO入試・推薦入試の拡大などを通して、多面的・多角的な評価の実現が目指されている。この研究集会では、日本の改革動向を整理するとともに、東アジア諸国やフランスにおける大学入試改革、ならびに国際バカロレアのシステムや内容を検討し、大学入試のあり方を考えたい。

司 会：田中耕治（佛教大学）、石井英真（京都大学）

挨拶：田中耕治（日本教育学会近畿地区理事／佛教大学教授／京都大学名誉教授）

主 催：日本教育学会近畿地区

（担当：日本教育学会近畿地区理事・田中耕治〔佛教大学〕／同・西岡加名恵〔京都大学〕）

後 援：京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センターE.FORUM

照 会 先：西岡加名恵（[nishioka.kanae.2v@kyoto-u.ac.jp](mailto:nishioka.kanae.2v@kyoto-u.ac.jp)）

備 考：どなたでも自由に参加できます（事前申し込み不要／参加費無料）。

2018年5月12日(土) 日本教育学会近畿地区 研究集会  
「大学入試のあり方を問う—国際比較を通して」

# 日本における入試改革動向と 国際バカロレアの可能性

---

京都大学大学院教育学研究科  
教育方法研究室 博士後期課程

次橋 秀樹

# 自己紹介

---

- ・国際バカロレア (International Baccalaureate: IB) 研究

とくにその創設期 (初代代表の A. D. C. Peterson) に注目

現在は後期中等教育 (DP) の歴史科目を中心に日本の教育課程との親和性について

- ・日本の入試制度研究

共通一次試験 / 偏差値

- ・探究活動の実践研究

高等学校を中心に、どのようにして探究的な学びをカリキュラムに入れていくかについて

# 内容

---

## 1. 分析の視角と検討の対象について

大学入試の三原則と日本の入試改革のあゆみ

## 2. 各入試について

### (1) 共通一次試験(1979年～1989年)

⇒初の大規模共通テストの理念と実際から学べることは何か

### (2) 大学入学共通テスト(2021年～)

⇒すでに入試にどのような変化が起きているか

### (3) 国際バカロレア (IB・1968年～) という教育プログラム

⇒どのようなプログラムで、どのような評価方法なのか

⇒IBは今後の日本の大学入試改革に何を投げかけているか

# 日本の大学入試で重視される三原則

入試を捉えるための視角として

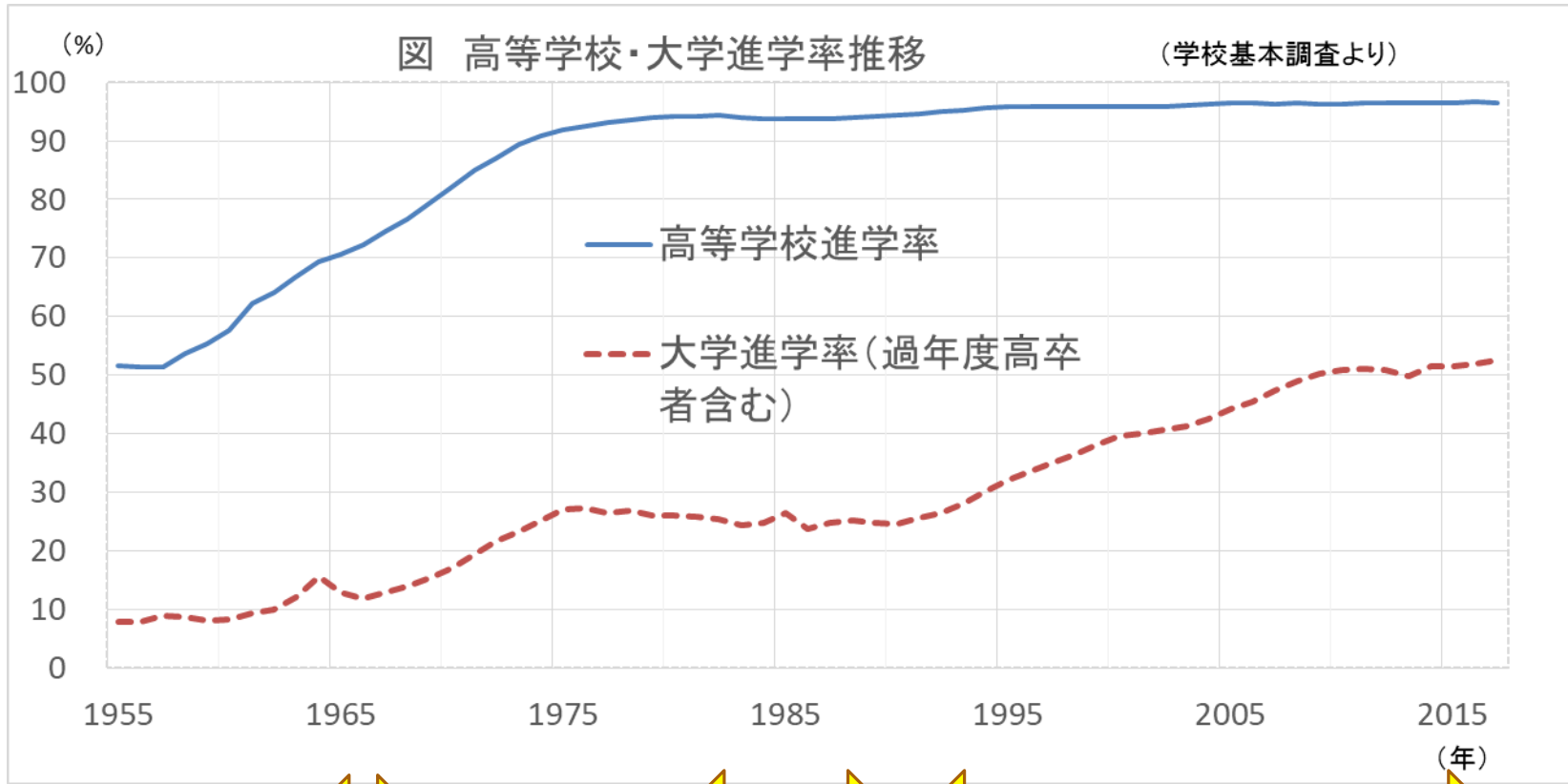
| 佐々木(1984) | 木村(2010)     |
|-----------|--------------|
| 公正、妥当の原則  | 公平性の確保       |
| 能力・適性の原則  | 適切な能力の判定     |
| 高校教育尊重の原則 | 下級学校への悪影響の排除 |

文部科学省『平成30年度大学入学者選抜実施要項』(p.1)  
「各大学は、入学者の選抜を行うに当たり、**公正かつ妥当**な方法によって、入学志願者の**能力・意欲・適性等**を多面的・総合的に判定する。その際、各大学は、年齢、性別、国籍、家庭環境等に関して多様な背景を持った学生の受入れに配慮する。あわせて、**高等学校**(中等教育学校の後期課程及び特別支援学校の高等部を含む。以下同じ。)**における適切な教育の実施を阻害することとならないよう配慮**する。」

# 日本の入試改革のあゆみ

| 共通試験のあゆみ   | 各大学の動き   | 社会の動き  |
|--|--|--|
| 進学適性検査、能研テスト ... 定着せず<br>～各大学における入学選抜<br>1979年～ <u>共通一次試験</u><br>{ 国公立のみ<br>5教科7科目必須<br>1990年～ <u>大学入試センター試験</u><br>{ アラカルト方式<br>私大の参加<br>2006年～ 英語にリスニング<br>2021年～ <u>大学入学共通テスト</u> | 入試の多様化・多<br>元化すすむ<br>推薦・AO入試から<br>の入学者増加<br>2016年～ 東大で<br>推薦入試、京大で<br>特色入試開始 | 大学の序列化すすむ<br>大学進学率の上昇と<br>大学数増加傾向続く<br><br>2006年 未履修問題<br>2013年 大学数が減少<br>に転じる |

# 進学率の推移



能研テスト

共通一次

センター試験



# (1) 共通一次試験

---

【参考】センター試験との相違点（共通一次試験の特徴）

- ① 私立大学は参加していない
- ② 5教科7科目すべて受験することが必須※
- ③ 二次試験は前期・中期・後期ではなく、同一日程1回勝負※  
(※1987年に一部変更)

# 共通一次試験が生まれた背景

## ①高校側 「下級学校への悪影響の排除」

難問・奇問・悪問はやめてほしい

入試競争が厳しすぎる

## ②大学側 「適切な能力の判定」

内申書不信(高校間格差の問題)

大学別試験問題作成の労力

急増する志願者への対応

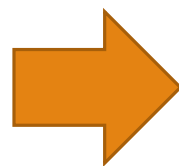
一期校と二期校の格差

## ③文部省側

日本にも共通テストと専門研究機関を

高校と大学の円滑な接続を

東大頂点のピラミッド構造打破



良質の問題を作るテスト機関(大学入試センター)が、評価が客観的で**公平**な、**高校教育を尊重**した共通問題をつくること。二次試験との総合によって受験生の**適切な能力を判定**することで三者の利害が一致。

# 「適切な能力の判定」のゆらぎ 悪問・難問・奇問の例

---

①以下の曲目はある放送局が、音楽教養の番組として学校向けに放送したプログラムだが、この5回の放送を通じて、編成者が聴取者につかませようとした二つの意図を推定して書け。この5回のあとにさらに2回のプロを追加するとしたら、いかなる曲目を選ぶべきか、曲目と作曲者と追加の理由を記せ。

- ・第1回 ラグビー(オネガー) フランス組曲(ミヨ) ハラ・ウイ(メシアン)
- ・第2回 弦楽四重奏曲六番(バルトーク) ハーリ。ヤーノシュ(コダーイ)
- ・第3回 ピアノと管弦のための主題と変奏曲(松平頼則) ピアノのためのソナチネ(諸井誠)
- ・第4回 森の歌(シヨスタコーヴィッチ) ピアノ協奏曲(ハチャトゥーリヤン)
- ・第5回 威風堂々(エルガー) (お茶の水女子大学・1960年頃の社会科学入試問題)

村松喬『教育の森1 進学のあらし』毎日新聞社、1965年、pp.141-142。

②「わが国の戦後教育における国家と教育との関係について述べよ」(法政大学・1971年)

③「外交史の流れを追い、日本の将来の外交問題を論ぜよ」(京浜女子大学・1971年)

全国進路指導研究会『選別の教育と入試制度』民衆社、1973年、p.112。

# 永井道雄と共通一次試験

---

**共通一次試験**(1979年～1989年)の導入が決まったとき(1976年)の文部大臣。教育学者。京大卒。

「むしろ二次が丁寧にできるために共通一次が考えられたと理解した方がいい」

(『朝日ジャーナル』1977年12月30日号)

⇒「適切な能力の判定」は  
二次試験で行うという前提

写真「永井道雄」  
: 文部科学省HP「歴代大臣一覧」より

# 永井が、とくに注意していたところ

---

[配点比について] 共通一次試験を90%まで見れば受験産業が介入して大学間格差が明らかになる。10%しか見ずに残りはそれぞれの大学が考えれば、大学の教員が日本の教育評価をどう考えるかが問題になり、大学の多様性が入ってくる。

(『朝日ジャーナル』1977年12月23日～30日号)

総合判定である以上、共通一次試験の配点上限は50%であるべき。

(『朝日ジャーナル』1979年3月23日号)

⇒各大学が共通一次試験を重んじすぎないことが重要、と主張。ただし、省内で議論されたものの大学の自治と自主性に配慮して配点比のルール化をせず。

写真「永井道雄」  
: 文部科学省HP「歴代大臣一覧」より

# 共通一次試験導入の結果

---

各大学は共通一次試験重視  
(客観性、**公平性への過度の依存**)

二次試験の面接・小論文入試は広まらず、多様化は進まなかった  
⇒ 共通尺度が生まれ、大学の**序列化**は進んだ。

「日本の大学の**自主性を過大評価**した私の不明であったのでしょうか。」

(永井道雄『子どもたちはどこへ』講談社、1983年、p.127。)

「二次の科目、減る大勢 二教科型目立つ 共通テストで変わる国立大入試 (大半は一次に重点)」  
参照: 朝日新聞朝刊、1977年4月5日

# 共通一次試験の成果

---

## 専門機関「大学入試センター」の誕生

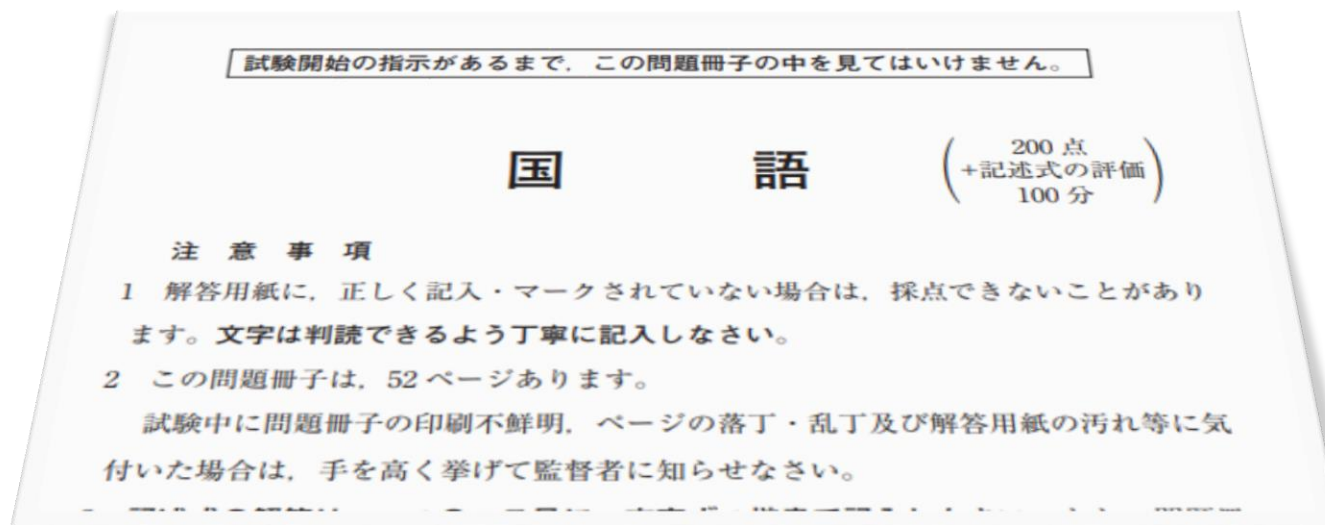
- ・700人を超える大学教員が作成と点検に関わる
- ・半数の委員が毎年交代
- ・2年間100日近く缶詰で問題作成

⇒「はじめは学習指導要領の『が』の字を見たこともない大学の先生が(中略)本務校に戻れば、おそらく当該分野(科目)について**抜群の高大接続の専門家**になっておられるだろうと思います。」(荒井克弘)

全国大学入学者選抜研究連絡協議会・独立行政法人大学入試センター『大学入試研究の動向』第32号、2015年3月、pp.38-39。

「奇問減った大学入試 昨年の問題 記述式、主流の時代 共通一次、私立にも影響」  
参照：朝日新聞夕刊、1980年2月18日

## (2) 大学入学共通テスト



画像：大学入試センターホームページ「平成29年度試行調査 国語」表紙を発表者加工  
[[http://www.dnc.ac.jp/daigakunyugakukibousyagakuryokuhyoka\\_test/pre-test\\_h29\\_01.html](http://www.dnc.ac.jp/daigakunyugakukibousyagakuryokuhyoka_test/pre-test_h29_01.html)]



# センター試験から 大学入学共通テストへの変更

2021年1月(現高校1年生)より実施

- ・各教科・科目の特質に応じ、知識・技能を十分有しているかの評価も行いつつ、思考力・判断力・表現力を中心に評価を行う
- ・記述式問題の導入(「国語」、「数学Ⅰ」、「数学Ⅰ・数学A」)
- ・英語4技能評価に資格・検定試験を利用

※共通テスト「英語」は、2023年度までは実施。各大学の判断で共通テストと認定試験のいずれか、又は双方を選択利用することを可能とする。  
※2024年度以降、地理歴史・公民分野や理科分野等でも記述式問題を導入する方向で検討を進める。

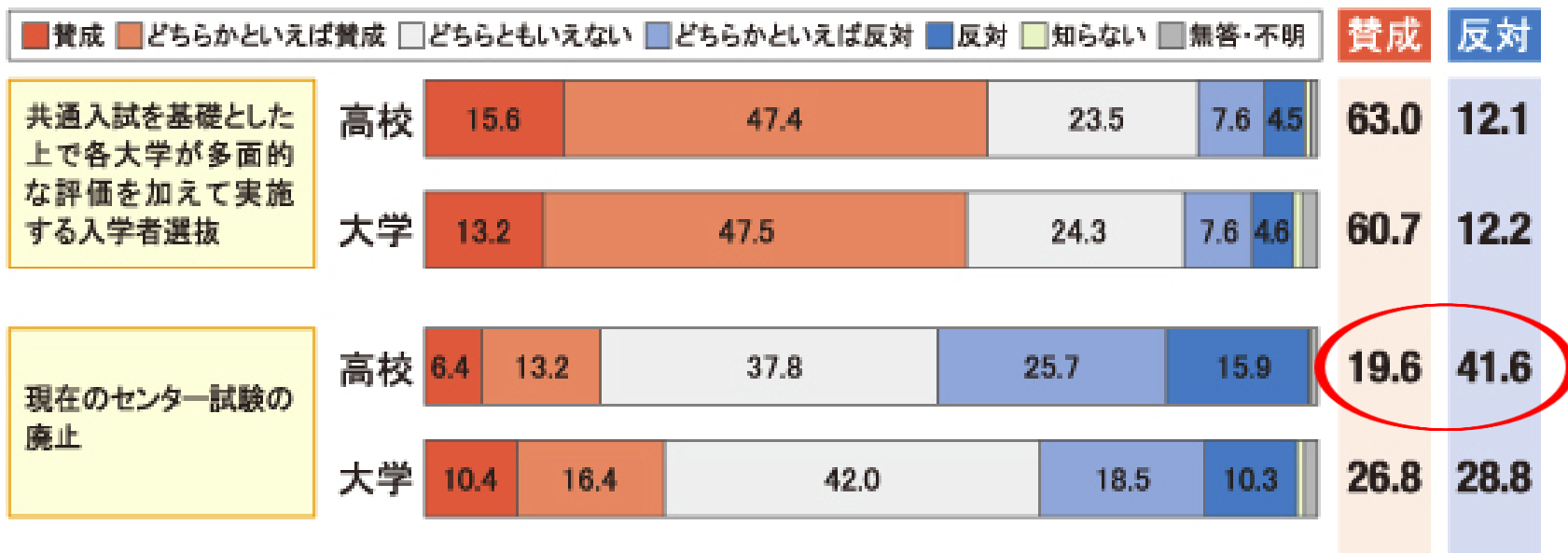
# 大学入学共通テストが生まれた背景

センター試験への批判や廃止を望む声は決して大きくなかった

大学入試制度改革に対する賛否(全体)

高校調査

大学調査



ベネッセ教育総合研究所「高大接続に関する調査(速報)」2014年1月23日発表より抜粋

# 大学入学共通テストが生まれた背景 「下級学校への悪影響の排除」の追求

「確かな学力」の育成(2007年・学校教育法改正)

- ・基礎的な知識及び技能
- ・これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力
- ・主体的に学習に取り組む態度

ところが「小・中学校に比べて**高校では**知識伝達型の授業に留まる傾向があり、学力の三要素を踏まえた指導が徹底されていない。」

なぜなら「現行の**大学入試**が学力の三要素に対応した学力評価を行っていないことの影響が大きい。」

中教審「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～(答申)」2014年12月22日。

大学入試が変わらなければ高校以下の教育は変わらない

(高大接続改革のキーは入試)

# 出題内容の変化

大学入学共通テスト 平成29年度試行調査 国語 大問1問3(記述式問題) 解答例

|  |     |  |
|--|-----|--|
|  |     | める」は正合としない。  |
|  | 正答例 | ・確かに、部活動の終了時間の延長の要望は多く、市内に延長を認める高校も多いことから、延長を提案することは妥当である。しかし、通学路は道幅も狭い上に午後六時前後の交通量が特に多いため、安全確保に問題があり、延長は認められにくいのではないかと。(118字) |

同 出題のねらい

| 解答<br>番号 | 高等学校学習指導要領の内容                                       | 主に問いたい資質・能力     |   | 小問の概要  | 正答率<br>(%) |
|----------|---|-----------------|---|--|------------|
|          |   | 知識・技能           | 思考力・判断力・<br>表現力   |  |            |
| 問3 3     | B 書くこと<br>(1)イ 論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること。 | 情報の扱い方に関する知識・技能 | テキストを踏まえ、推論による情報の補足や、既有知識や経験による情報の整理を行って、テキストに対する考えを説明することができる。<br>テキストを踏まえ、条件として示された目的等に応じて、必要な情報を比較したり関連付けたりして、テキストに対する考えを説明することができる。 | 【記述式】<br>テキスト(会話文)の内容をとらえ、他の複数のテキスト(資料①～③)を比較し、全体の要旨を理解した上で、指定された登場人物の立場に立って、対立点を整理し、具体的な根拠を明らかにして、基本的な立場と予測される意見について考え、的確に説明する。 |            |

# 併せて推薦・AO入試の変更 「下級学校への悪影響の排除」の追求

総合型選抜(現:AO入試) 出願9月以降(現行8月)、発表11月以降

学校推薦型選抜(現:推薦入試) 出願11月以降(変更なし)、発表12月以降

どちらも調査書等の出願書類だけでなく、各大学が実施する評価方法等(※)又は「大学入学共通テスト」のうち、**少なくともいずれか一つの活用を必須化。**

⇔ **学力把握措置のない私大AO・推薦入試の増加や早期進学  
先決定によるモチベーションの低下という問題への対応。**

※例えば、自らの考えに基づき論を立てて記述させる評価方法(小論文等)、プレゼンテーション、口頭試問、実技、各教科・科目に係るテスト、資格・検定試験の成績など

文部科学省「平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告について」(2017年7月13日)

⇒ **さまざまな評価方法については、とくに公平性が問われる。**

# 併せて調査書の変更 「適切な能力の判定」の支援(?)

現行調査書の「指導上参考となる諸事項」の欄を拡充(下表のように細分化)  
A4両面1枚の制限を撤廃

|                   |      |  |  |   |
|-------------------|------|--|--|---|
| 7.<br>指導上参考となる諸事項 | 第1学年 | (1) 学習における特徴等  | (2) 行動の特徴、特技等  | (3) 部活動、ボランティア活動、留学・海外経験等<br>(注) 具体的な取組内容、期間等 |
|                   |      | (4) 取得資格、検定等<br>(注) 専門高校の校長会や民間事業者等が実施する資格・検定の内容、取得スコア・取得時期等 | (5) 表彰・顕彰等の記録<br>(注) 各種大会やコンクール等の内容や時期、科学オリンピック等における成績、時期<br>国際バカロレアなど国際通用性のある大学入学資格試験における成績・時期等 | (6) その他<br>(注) 生徒が自ら関わってきた諸活動など               |

|                   |      |                                |                                   |         |
|-------------------|------|--------------------------------|-----------------------------------|---------|
| 7.<br>指導上参考となる諸事項 |      | (1) 学習における特徴等<br>(2) 行動の特徴、特技等 | (3) 部活動、ボランティア活動等<br>(4) 取得資格、検定等 | (5) その他 |
|                   | 第1学年 |                                |                                   |         |
|                   | 第2学年 |                                |                                   |         |

上 2021年度からの調査書  
左 現行調査書  
文部科学省「平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告について」(2017年7月13日)

# 高校入試にも変化

秋田県公立高等学校入学者選抜学力検査問題 国語(2017年)

現在、科学技術の様々な分野で研究開発が進み、私たちの生活も大きく変化してきている。あなたが感じている科学技術の発展による変化を取り上げ、それについてのあなたの考えを、次の〈条件〉にしたがって書きなさい。

〈条件〉1 題名は不要 2 字数は二百字以上、二百五十字以内

## 採点基準

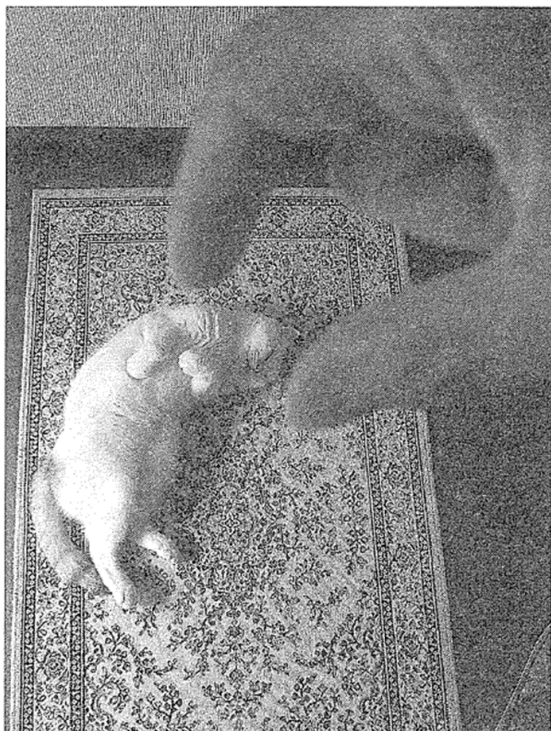
|          |  |    |
|----------|--|----|
| 内容       | ・科学技術の発展による生活の変化を取り上げ、考えを分かりやすく述べている。  | 5点 |
| 表現<br>叙述 | ・内容の述べ方や表現方法を工夫している。<br>・言葉の使い方が適切である。 | 4点 |
| 表記等      | ・漢字、区切り符号などの使い方や、仮名遣いが適切である。           | 3点 |

⇒ 公立高校において思考力・判断力・表現力を問う記述問題の出題や、「独自入試」や、各高校・学科の特色に合わせた「選択問題」の導入もはじまっている。



# 変化には慌てず、冷静な対応を

2 (A) 下の画像について、あなたが思うことを述べよ。全体で60～80語の英語で答えること。



(B) 下の絵に描かれた状況を自由に解釈し、40～50語の英語で説明せよ。



いずれも  
東京大学  
前期試験  
英語問題  
(左2016年)  
(右2007年)

これまでも思考力・判断力・表現力を問う出題はあったが、メディアでは新傾向として過敏に捉えられることも。



# 入試改革への疑問 新しいテストの影響は限定的ではないか

高3生のうちセンター試験を

受験しない  
602,813  
56%

受験する  
471,842  
44%

●進路参考

専門学校 約7万人  
就職 約19万人  
就職も就学もしていない  
約5万人

短大 約5万人  
私大に推薦・AO入試で入学  
約25万人

(大学入試センターHP「志願者数」  
および平成29年学校基本調査をも  
とに「受験しない」人数を算出)

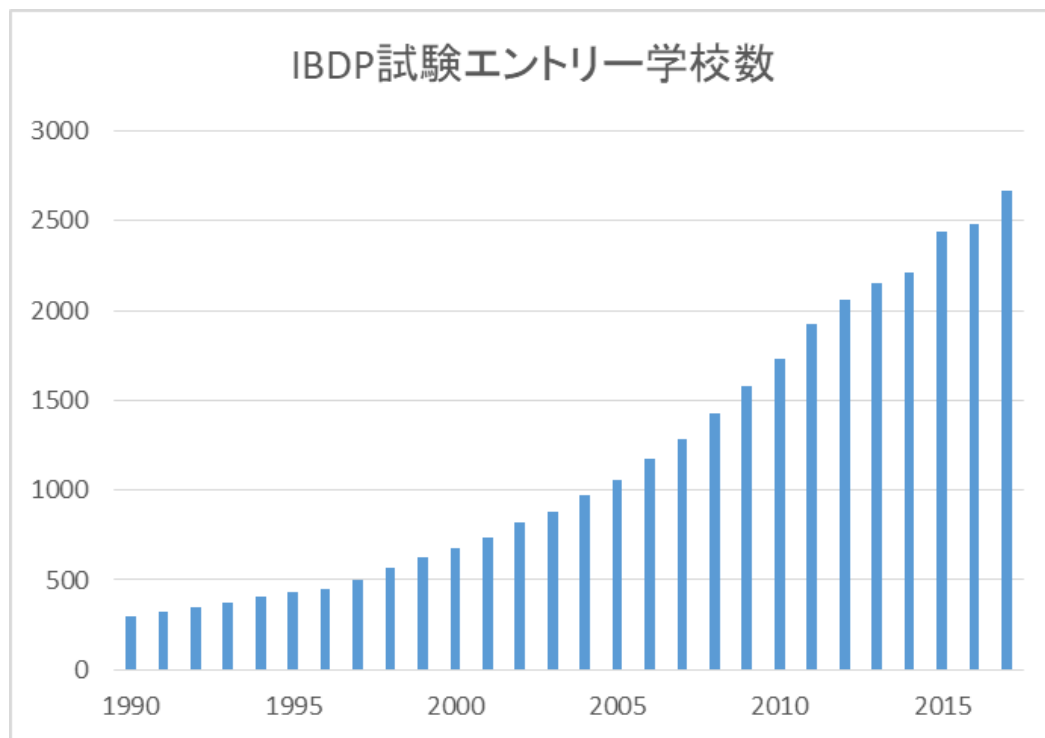
## (3) 国際バカロレア

---

国際バカロレア (International Baccalaureate: IB) は、もともと外交官や国際機関職員、駐在員等の子どもたちが、現地のインターナショナルスクール卒業後に、それぞれ母国へ戻って大学に円滑に入学できるよう、共通の大学入学資格を付与することを目指して開始された民間の国際的な教育プログラムである。一般的には、IBはここで与えられる大学入学資格のことも指している。ところで、資格試験と選抜試験は入試制度を捉える際に対置されるが、IBは選抜試験の要素も併せ持った資格試験である点でユニークでもあり、日本にとっても示唆的と言えよう。

※国際バカロレアはフランスのバカロレアとはまったく別のもの

# 大学入学資格としてのDP



本発表では、4つあるIBプログラムの中でも、大学入学資格として国際的に認められている**DP**(Diploma Programme: ディプロマ資格プログラム、16歳～19歳の2年間、後期中等教育に相当)を扱います。

長く日本におけるIBの採用はインターナショナル・スクールに限定

**2013年**閣議決定「日本再興戦略 -JAPAN is BACK-」において、2018年までに日本のIB校を200校にすると提言 ⇒ 2018年5月現在**57**校(うちDP37校、一条校20校)

# IB導入促進のための日本での動き

---

## 2013年以降、文部科学省を中心に推進

- ・授業と試験を日本語を使って行えるプログラム（日本語DP）の開発
- ・指導資料・手引きなどの翻訳や教員セミナーの開催・支援
- ・学習指導要領と対応できるよう特例措置（2015年）
  - ①DP科目の卒業単位参入上限拡大、②英・数・理・総学をDP科をもって代えられるように、③国語以外の教科は英語による指導を許可
- ・国立大学協会が、2021年度までに「推薦入試、AO入試、国際バカロレア入試等の拡大（入学定員の30%を目標）」と発表

（国立大学協会「国立大学の将来ビジョンに関するアクションプラン 工程表」2015年9月）

# IBDPのプログラムの特徴

---

- ・ディプロマ資格取得のためには6科目＋コア3要件が必須
- ・6科目は、母国語、外国語、人文・社会科学系科目群、理科、数学、芸術という6つのグループの中からそれぞれ1科目を選択（芸術グループのみ他グループの科目で代用可能）
- ・3要件とは、課題論文（EE: Extended Essay）、知の理論（TOK: Theory of Knowledge）、創造性・活動・奉仕（CAS: Creativity/Action/Service）
- ・HL（240時間）とSL（150時間）の2段階があり、3～4科目をHL、2～3科目をSLとして履修。各自の進路や関心に合わせて強弱をつける

⇒文理バランス型だが、専門に合わせて学びの強弱もつけられる

...現在、日本におけるIBへの興味・関心はTOKに代表される批判的思考に偏りがち

# 国際バカロレア機構初代代表 A.D.C.PetersonとIBの理念

---

イギリスの大学が要求する「適切な能力」としての科目数絞り込みに強い疑念

母国イギリスの後期中等教育(シックス・フォーム)において、文系学部志望ならば数学を学ばないなど、大学進学準備のために学習教科を絞りこんでいることを**過度の専門化**として強く批判。

教科固有の判断力を偏りなく育てることが後期中等教育の目的であるとし、文系・理系科目をどちらも学ぶことを**一般教育 (general education)**として主張。専門化そのものは「知的な背伸び」やチャレンジがあると評価。

オックスフォード大学教育学部長在任中に後期中等教育のカリキュラム改革と入試(Aレベル)改革を提案し、運動するも賛同が得られず失敗。のちIBの創設に関わり、IBでは**カリキュラムと評価を一体的に生み出した**。

*Arts and Science side in the Sixth Form* (1960)

教科学習だけでは足りない部分として、統合・相補的なコース(a unifying and complementary course)も構想

⇒ 後のIBのTOKへと発展

当時、学ぶ教科数を増やす代わりに負担を減らしたhalf subject なども議論されていた。

# IBの評価方法の特徴

校内での指導教員による評価(内部評価)とプログラム2年目の11月に行われる世界統一テスト(外部評価)の組み合わせ

外部評価として  
テスト  
Paper1  
(短答式資料問題  
4題60分),  
Paper2  
(小論文2題90  
分),  
Paper3  
(小論文3題150分)

| 外部評価 | グループ. 科目例     | 内部評価 |
|------|---------------|------|
| 70   | 1 言語A: 文学(HL) | 30   |
| 70   | 2 言語B(HL)     | 30   |
| 80   | 3 歴史(HL)      | 20   |
| 80   | 4 生物(SL)      | 20   |
| 80   | 5 数学(SL)      | 20   |
| 65   | 6 美術(SL)      | 35   |

内部評価として  
レポート  
「歴史研究」  
英語2,200語  
日本語4,400字を  
上限に  
トピック自由選択  
  
※ループリックや  
モデレーションで  
**公平性**を高める工  
夫も見られる

各グループ7点満点(傾斜なし) + コア(TOK・EE)で3点  
45点満点中、原則24点以上(※)でIBディプロマ取得  
※例えば24点に達していてもHLに2点があったり、SLで1点があった場合は落  
第など細かな条件も定められている。

# IBDPにおける試験問題例 （「歴史」科目）

---

2. 戦争が社会の変革を加速させるという見方にどの程度あなたは賛同できるか？
4. ロシアの内戦、スペイン市民戦争、中国の国共内戦の3つのうち2つを選んで、その内戦が起こった理由、影響、外国の関与について比較しなさい。

（2011年11月試験「歴史」科目、Paper2[「戦争の原因、実際と結果」選択問題例]）

国際バカロレア機構ホームページ「Sample exam papers」より抜粋のうえ筆者訳

[[https://www.ibo.org/contentassets/7f6c7681e0b34fc8b0541c1229c7521d/gp3\\_historyhsl2.pdf](https://www.ibo.org/contentassets/7f6c7681e0b34fc8b0541c1229c7521d/gp3_historyhsl2.pdf)]

（2018年5月1日確認）

- ⇒ 原因・結果・変化・連続などの「概念理解」を重視（「見方・考え方」と関連）
- ⇒ 例示が必要であり、知識のうえに成り立つ思考力・判断力・表現力が問われる



# IBDPにおける問いの例 (TOK 知識の領域「歴史」)

---

「歴史学習はとても重要なのでIBでは必修科目にすべきだ」という主張に対してなるべく多くの賛否の論拠を考えよ。

Activity 15.4 ③「なぜ歴史を学ぶか」

技術は未来を形作るうえで、個人の行動よりも重大な役割を果たす、というマルクスの主張にあなたは賛成か、反対か。

Activity 15.18 ⑦「歴史の理論－経済決定論」

Richard van de Lagemaat, *Theory of Knowledge for the IB Diploma, second edition*, Cambridge University Press, 2013.

⇒ TOKには構造化された独特の探究アプローチがある(これが難解とされる)。たとえば、学問を8つの領域「数学」・「自然科学」・「ヒューマンサイエンス」・「芸術」・「歴史」・「倫理」・「宗教的知識の体系」・「土地固有の知識の体系」に分類して、同じ知識であっても領域の固有性があることを検討する。このように各教科で学んだ知識がどう生まれ、どのような不安定さをもつかなどを問い直す教科往還・教科横断プロセスがプログラムの中に必須要件として埋め込まれている。

# 日本におけるIB導入の課題

- ・学習指導要領との兼ね合い(学習内容の相違)
- ・日本の大学入試制度との兼ね合い(入試科目の相違・若干名という定員の限界)

国立大学初の国際バカロレア入試(AO入試)を採用した岡山大学では、現在、医学部医学科(2人)も含め、全学部各学科で(若干人に)に門を開く。条件はIBフルディプロマ+各学部で設定。

岡山大学医学部医学科の例...「言語Aを日本語により履修し、成績評価が4以上又は、言語Bを日本語により履修し、HLで成績評価が6以上の者」かつ「物理、化学、生物から2科目及び数学(うち1科目はHL成績評価4以上、他の2科目はSL成績評価5以上又はHL成績評価3以上)」

- ・選抜性が相対的に低下している日本国内の大学入試に対して、IBが(とくにフルディプロマ取得を狙う場合に)求めるハードな学習
- ・少人数教育や外国人教員雇用、設備充実、諸経費支払いなどの金銭的コスト負担
  - ⇒IB教育を受けられるかどうかについて**アクセスの公平性**の問題
- ・「下級学校の教育に悪影響」...とは言えないまでも、スタンダード化されたプログラムと内部評価を行うことが「**高校教育の尊重**」していると言えるのか

# 日本での「換算」の可能性

## 14. IBと大学入試センター試験との換算表の作成の在り方について

[以下はIBとセンター試験の換算表を作るべきではないか、あるいはIBとセンター試験は問題が本質的に異なるので換算表は意味がないのではないか、という問いに対して、2014年時点での文部科学省の回答。下線部は発表者による。]

- ・現在の大学入試センター試験については、一回の試験で高等学校の学習成果を評価するのに対し、IBのスコアは最終試験だけではなく教師による内部評価も加味したものであるなど、自ずとそれぞれの性格は異なってくる側面もあると考えられます。
- ・現時点では、アドバイザー委員会報告書にもありますように、これまで日本でIBを活用した入試を行っている大学では、AO入試や特別入試等の一環として、IBスコアを勘案する例が一般的である現状を踏まえると、当面は、各大学のアドミッションポリシーに基づき、いわゆる「IB枠」の設定を含め、IBの活用を促していくことから始めることが現実的と考えています。
- ・なお、教育再生実行会議第四次提言（平成25年10月31日）では、現在の大学入試センター試験に代わる発展レベルの達成度テストを創設し、その結果を段階的に示すなど、一点刻みの選抜から脱却できるよう利用の仕方を工夫するとともに、受験生が持てる力を存分に発揮できるよう、複数回の受験機会を設けることとしており、具体的な制度設計については、現在、中央教育審議会高大接続特別部会において、議論を行っているところです。（文部科学省回答）

「(参考資料) 国際バカロレア日本アドバイザー委員会における質問に対する回答集(Q&A)」2014年4月  
[[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/ib/1356337.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1356337.htm)] (2018年5月1日確認)より

# まとめ

---

- ・日本の大学入試においては、**公平性の確保**（共通テストがもつ客観性への信頼）が、ときに過度と言われるほどに重視される（共通一次試験の経緯から）。
- ・**適切な能力の判定**のために小論文や面接など選抜方法の多様化を「上から」「自主的」に求めたり期待したりしても、それに応える大学は少なかった（共通一次試験の経緯から）。
- ・大学入試が下級学校に与える影響は大きい。下級学校で育てようとしている**思考力・判断力・表現力を確かめられる試験**が模索され、徐々に入試にも現れている。
- ・IBDPでは6つのグループから広く学びつつ、2つのレベル設定によって各科目の学びに強弱もつけられる。大学入学資格取得のためには**すべての科目が評価に用いられる**（いわゆる「入試に使わない科目」は存在しない）。
- ・IBDPでは**共通試験（外部評価）と内部評価を総合した評価**を行い、指導した高校教員も評価に参加する。また、資格としてだけでなくポイントによって選抜にも対応する。
- ・IBには、近年日本で注目される「見方・考え方」を含んだ学びや、深い学びを誘う**問いの例が豊富**にある。こうした問いに答えるためには一定の教科知識も不可欠である。

# 参考文献

---

- ・佐々木享『大学入試制度』大月書店、1984年。
- ・木村拓也「共通第1次試験・センター試験の制度的妥当性の問題―戦後大学入学者選抜制度史の視点から」中村高康編『リーディングス 日本の高等教育 第1巻 大学への進学―選抜と接続』玉川大学出版会、2010年。
- ・西岡加名恵「大学入試改革の現状と課題―パフォーマンス評価の視点から―」『名古屋高等教育研究』第17号、2017年、pp197-217。
- ・University of Oxford. Department of Education, *Arts and Science Sides in the Sixth Form: A Report to the Gulbenkian Foundation*, Abingdon: Abbey Press, 1960.
- ・A. D. C. Peterson, *Schools Across Frontiers: The Story of the International Baccalaureate and the United World College (2nd ed.)*, Chicago and La salle, Illinois: Open Court, 2003.
- ・次橋秀樹「A. D. C.ピーターソンのカリキュラム構想に見る一般教育観―シックス・フォーム改革案から国際バカロレアへの連続性に注目して」『カリキュラム研究』第26号、pp.1-13。
- ・次橋秀樹「国際バカロレアの歴史教育に関する--考察 - DP 科目『歴史』とTOK 領域『歴史』に注目して--」『教育方法の探究』第20号、2017年、pp.45-52。
- ・Richard van de Lagemaat, *Theory of Knowledge for the IB Diploma, second edition*, Cambridge University Press, 2013.
- ・福田誠治『国際バカロレアとこれからの大学入試 知を創造するアクティブ・ラーニング』亜紀書房、2015年。
- ・岩崎久美子・大迫弘和編著『国際バカロレアの現在』ジヤース教育新社、2017年。
- ・李霞編著『グローバル人材育成と国際バカロレア―アジア諸国のIB導入実態』東信堂、2018年。
- ・IBOホームページ「Resources for schools in Japan」各種資料。  
参考URL[<http://www.ibo.org/about-the-ib/the-ib-by-region/ib-asia-pacific/information-for-schools-in-japan/>]